

びろっぱ

Vol. 441 **4**



新人を迎えて
近森会グループ各施設の目標
医師の働き方改革〈近森病院宿日直について〉

医療情報

植込み型心臓電気デバイスのリード抜去術

近森病院 近森リハビリテーション病院 近森オルソリハビリテーション病院 からのお知らせ

ゴールデンウィークは
暦通りの診療体制
です。

4月			5月							
28日 (金)	29日 (土) 昭和の日	30日 (日)	1日 (月)	2日 (火)	3日 (水) 憲法記念日	4日 (木) みどりの日	5日 (金) こどもの日	6日 (土)	7日 (日)	8日 (月)
通常診療			救急体制での診療			通常診療			救急体制での診療	



新人を迎え

近森病院 院長 川井 和哉

今年も多くの新人を迎えることができたことを嬉しく思います。新入職員の皆さん、入職おめでとうございます。新しい仲間として、職員一同心から歓迎します。

新しい力は我々にとっても大きな刺激になり、近森会グループがますます活気づき成長する糧となります。一緒に高知の医療を支え、県民にとって頼りになる病院として発展させていきましょう。

みんなが主役 ～私たちの近森会グループ～

近森会グループは、現在地で近森外科が開院してから77年の歴史があります。現在は、高知の基幹病院として、高度急性期から急性期、回復期リハビリ、在宅サポートまでシームレスな医療を展開しています。生命にかかわる病気になっても、早く治療し、もし障害が残ってもリハビリで可能な限り住み慣れた地域に帰ることができるよう、グループ全体で努力しています。

近森会グループ全体で現在、医師164名を含めスタッフ総数2,275名ですが、これだけ多くのスタッフでも全ての医療に対応することはできません。そのため病状が落ち着けば、かかりつけの先生方に逆紹介し地域で診てもらい、悪くなればまた近森へ紹介していただくという地域医療連携を20年以上前から実践してきました。

さらには、医師、看護師の周辺業務を多職種に委譲し、診断、治療、看護というコア業務に絞り込むことで、医師、看護師は本来の業務に専念できる体制をとっています。多くの医療専門職が病棟に常駐し、それぞれの視点で患者さんを診て判断し介入しています。それぞれの分野では、みんなが主役であり、いきいきとやりがいをもって働いています。

充実の研修体制と 世話好きの先輩と

今年の新人は、新型コロナウイルス感染症のため学生生活の内の3年間に大きな影響を受けました。クラブ活動、学園祭や友達との旅行など、楽しみにしていたイベントと現実のギャップに、悩んだこともたくさんあったと思います。そんな中でも学生生活を楽しむために、各自が試行錯誤し工夫をしてきたことでしょう。その姿勢は、社会人になっても大いに役立つと思います。また、感染防御について高いスキルを持っていることも利点になるでしょう。

社会人になると学生時代とは違い、教科書やマニュアル通りにいかないこともあります。職場では覚えることも多くあり、分からないこともこれからたくさん出てくるでしょう。初めは分からないのが当然です。遠慮なく先輩たちに訊いて、どんどん学んでいってください。

対面授業や臨床実習ができず、臨床現場に上手く入っていけるかどうか、不安を抱えている新人も多いのではないかと思います。しかし、心配ありません、大丈夫です。近森会グループでは、入職してから充実した研修体制を取っています。また、本当に世話好きが多く、先輩たちからの熱烈指導という風土もありますので、安心してください。

ただし、社会人として、笑顔で挨拶をきちん

て

としましょう。それがすべての基本です。そして、「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」を忘れないようにしてください。

地域医療の激戦区を乗り越えろ！ ～コロナ禍で共に戦った 仲間を強みに～

わが国で新型コロナウイルス感染症患者が確認されてから、3年が経とうとしています。大災害級のイベントであり、当院も大きな影響を受けました。しかし、職員達の、状況に応じた迅速な対応や、職種を超えた協力体制によって何とか乗り越えることができました。質の高い医療を目指し、自己変革を繰り返すことによって培ってきたチーム医療の証だと誇りに思います。当院の最大の強みはまさに「人」と言っているでしょう。

高齢先進県の高知では、すでに高齢者人口の減少が始まっています。高知県の医療は「機能分化と連携」から「淘汰と集約化」の時代を迎えました。近森病院は高度医療、急性期医療に機能を絞り込み、近森オルソリハビリテーション病院は内科の地域包括ケア病棟を加えた機能的な病院を目指すなど、時代に対応し再編成を進めています。

これからは価値の高い医療が求められます。重要なことは、より大きな成果を、いかに少

ないコストや時間で達成するかです。全職員が高価値の医療を理解し、実践していただきたいと思っています。

チーム医療でいきいきと やりがいを持って働こう

皆さんが入職された近森病院は、医師、看護師だけでなく、薬剤師やリハビリスタッフ、管理栄養士、臨床工学技士、メディカルソーシャルワーカー、歯科衛生士といった医療専門職とチームで医療を行う、多職種による多数精鋭の病棟常駐型チーム医療を展開しています。近森方式のチーム医療は、質、量ともに圧倒的で全国的に注目されています。このようなすばらしい職場で専門性を高め、患者さんにとっていい医療が提供できるスタッフに成長してください。

我々の目標は、患者さんが早く良くなって住み慣れた地域に帰り、元通りの生活を送っていただくことです。当院では医師、看護師ばかりでなく、医療専門職や事務、クラーク、アテンダント、清掃のスタッフに至るまで、みんなで心をつなげて同じ方向を向いて働いています。これからの皆さんの活躍を心から期待しています。医療人というやりがいのある仕事を通じて人間性を高め、皆さんの人生がいきいきと充実したものになることを祈っています。



近森会グループ

今までの発想にとらわれない自己変革 ～高知の地域医療を守る最後の砦になろう!!～



理事長
近森 正幸
ちかもり まさゆき

高知県は少子高齢化が10年から20年進んでおり、私達はその時々の変化に真摯に対応し続けてきました。従来から機能分化と連携を進めてきましたが、淘汰に対応する機能の集約化の時代を迎え、近森会グループも大きく再編成せざるを得なくなっています。

近森病院は高度急性期に機能を絞り込み、近森オルソリハビリテーション病院に地域包括ケア病棟、近森リハビリテーション病院に回復期リハビリテーション病棟を集約させます。

時代の変化に常に自己変革を続け、「高知の地域医療を守る最後の砦」として使命感をもってその責務を果たしていきたいと願っています。



近森病院

より価値の高い医療を目指し地域医療に貢献 ～救命救急、高度医療、医療連携、人材育成の四本柱～



院長
川井 和哉
かわい かずや

高知の救命救急・高度医療を守る基幹病院、困ったときに頼りになる病院であり続けることが目標です。

県下で最も救急体制が充実しており、当院でしか対応できない高度急性期集中治療もあります。24時間365日、救急医療を守るためには、平均在院日数を短縮し空床を確保する必要があります。チーム医療、病棟および地域医療連携を推進し、より強固な関係性を構築していきます。医師・スタッフの働き方改革を進め、より働きやすい環境を整備し、人材を確保・育成し、組織の若返りと活性化を推進します。

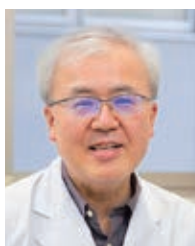
新規技術の導入と運営改善により、高難度手術や低侵襲手術、内視鏡治療の充実と増加を図り、悪性疾患治療にも力を注ぎます。

当院の役割と対応を常に検証・実践し、新たな価値を創生・最大化し、高知の地域医療に貢献していきます。



近森病院 総合心療センター

コミュニケーションによる自己の成長と変革 ～地域から求められる精神科医療を目指して～



センター長
戎 正司
えびす まさし

この3年間にわたるコロナ禍は、私たちの日常生活だけでなく、コミュニケーションを含む人の心の在り方にまで大きな影響を与えたようです。このコミュニケーションは情報伝達ではなく、多様な個性や特性をもった心と心の交流により、互いに自己の成長と変革を生み出すものを意味します。この生産的な交流は精神科医療にとって中心的な役割を果たしますが、オンラインやAIでどこまで可能なのかわからないのか、今後の精神科医療の検討課題だと考えます。

その問題意識をチームで共有し、我々は地域から求められる精神科医療を展開していくために、地域や他科と交流しながら、多様な精神疾患の治療という責務を果たしていきたいと思います。



各施設の目標

近森リハビリテーション病院

地域リハビリテーションを実践しよう



院長
和田 恵美子
わだ えみこ

近森リハビリテーション病院の回復期リハビリテーション病棟は、急性期治療を終了した患者を早期に引き受け、適切な医療保険のリハビリテーション医療サービスを行い、可能な限り自立、もしくは要介護状態を軽減することが重要な役割です。

高知県の急激な高齢化を受け介護の担い手は減少しており、いままこそ必要な方にしっかりとリハビリテーションを提供することが求められています。医療だけでなく福祉ともしっかりと連携して高知県の地域医療を支え、「どのような障害があっても住み慣れたところでその人らしく安心して生活できるように」地域リハビリテーションを実践していきます。



近森オルソリハビリテーション病院

開院以来の大変革に臨む



院長
鄭 明考
てい あきもり

全国でも数少ない整形外科専門のリハビリテーション病院として開院して16年が経過しました。開院時は回復期病棟と一般病棟でスタートし、その後に回復期+一般+亜急性期病棟へ転換、さらに亜急性期病棟を地域包括ケア病棟へ転換するなど時代の医療政策にあわせて柔軟に運営をしてきました。

今回、回復期病棟を地域包括ケア病棟へ転換することを機に整形外科に加えて内科患者さんの在宅復帰、地域医療に協力させていただくこととなりました。開院以来の大変革ではありますが、整形外科疾患の診療、看護、リハで培った経験の上にさらに内科疾患への対応力を身につけて、今後も地域医療を支える役割を果たしていきたいと思っています。



ファミユ高知

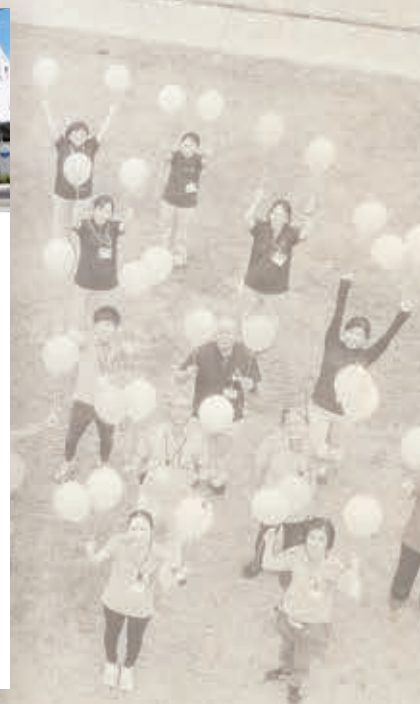
誰もが暮らしやすい地域共生社会の実現



センター長
西岡 由江
にしおか よしえ

高知駅前にある「しごと・生活サポートセンター ウェーブ」は、障害のある方の就労をサポートし、仕事に携わることや稼ぐことの喜びを生み出し、地域での生活を維持し、社会の一員として役割を担えるよう支援を実施します。一方、春野町という自然豊かな環境にある「高知ハビリーティングセンター」は、障害のある児童から大人までが、自分の障害と向き合い、人生の主人公になれるように、自己決定とエンパワメントを尊重したかわりを提供します。

社会福祉法人ファミユ高知として、医療や保健・福祉及び生活に関わるあらゆる人々と協力しあって地域リハビリテーションを実践し、障害のある、ないに関わらず誰もが暮らしやすい地域共生社会の実現に向けて取り組んでいます。





「医師の働き方改革の通知」の意味と 近森病院宿日直許可の申請について

社会医療法人近森会 常務理事 兼 管理部長 寺田 文彦

てらだ ふみひこ



医師の働き方改革の通知、その内容とは

2017年3月に厚生労働省にて「働き方改革実行計画」と称して医師の働き方に関する規制の具体的な在り方、労働時間の短縮策等についての検討が開始され、5年間の検討会を経て2022年1月19日に厚生労働省から「医師の働き方改革の通知」が発出された。2024年4月1日より関係政省令の施行が予定されている。内容は労働基準法と同通知をあわせて、自院の将来の病院機能と医師数を想定したうえで、宿日直の届け出やERの救急体制、医師の人材育成についての病院の対応を問うものであった。

医師労働時間の上限導入により、 求められる医師増員

従来、医師の業務は裁量労働制の範囲で時間外労働の上限規制から除外される、特別な聖職であった。昨今は、医師の過労死問題が報道されるようになり、“患者の命を預かる聖職の働き方”と“医師の健康確保を目的とした働き方”のバランスが求められる時代となった。

医療業界における第1のバンドラの箱は、初期臨床研修制度が開始されて、大学医局より地域の基幹病院に研修医が移っていったことであり、第2のバンドラの箱が、今回の医師の働き方改革による医師労働時間の上限の導入で、“労働時間のマネジメントができる体制があり、かつ症例経験や実績を積める病院”に医師が移動する可能性がある。

地方の救命救急センターなど日常的に多忙な病院は、医師の増員がなければ解決できないことであり、医師増員は最終的に患者さんを多く診療する医療機関となる大切な手段でもある。専門性の高いスタッフ数こそ医療の質であり、労働生産性に直結する。その場合、全ての職種の働き方に影響する病院ビジネスモデルの大転換が必要で、医師、看護師中心の医療から多職種によるチーム医療を行うために、職種間の役割分担に真剣に取り組む必要がある。

救急科医師の完全2交代制と、 集中系病棟の宿日直許可取得で、A水準を目指す

当院の具体的な取り組みとしては、まずER(救急外来)の勤務を救急科は完全2交代の日勤・夜勤とし、ERに休日に応援に行く内科系医師および研修医は日勤・夜勤を行い振替休日をとる、同様に応援に行く外科系医師は日勤終了後の17:30~22:00までを時間外勤務として、それ以降はon call体制をとり救急科の医師に患者対応を任せることで業務の集約化を図った。

また、集中系病棟の宿日直を取得するために、ERに勤務する医師と当番医のon call体制で病棟業務を行うように変更した。これによってICUと救命救急病棟は宿日直、HCUとSCUは日直+時間外(22:00まで)および22:00~8:30までを宿直として許可が取得できた(P.6参照)。結果としてA水準の年間960時間以内

の時間外勤務を遵守することになる。

大切なことは患者さん、ご家族からの視点であり、

i) 従来の主治医制からチーム担当
医制に変更になる

ii) 夜間の急変時に、原則として院内勤務医師が対応にあたる

iii) 時間外、休日の診療方針の説明は平日の日中をお願いする

など限られた医師の労働時間を有効活用するために、業務運用の変更が出てくることを許容して頂くことである(P.6参照)。

患者の命を預かる聖職として ～働き方改革の上で～

年間延べ入院患者140,000人、延べ外来患者150,000人、救急搬入6,500台、手術5,600件などの診療行為にかかる時間を、全ての職種で業務分担してゆくことを今後も継続してゆかなければならない。また患者さんの高齢化・重度化により診療行為が高度化し手間がかかったり、生産年齢人口の減少に伴って継続的な医療職の確保が困難になる時代が来ていることを念頭に、病院の持続性を図ってゆかなければならない。今後は新型コロナウイルス感染症や諸物価高騰という厳しい状況の中で、地域医療としての救命救急医療を守り、あわせて医師の労働環境の改善に取り組む覚悟を問われる通知であった。

目標

医師の時間外労働を
減らしても、
医療の質・量は落とさない

医師数を増やす

人件費がかかる

権限委譲で、
医師以外の職種を活用

チーム医療を
これまで以上に
真剣に推進する

医師のリクルートで
「働きやすい職場」を
アピールするためにも、
A水準取得が大切!

近森病院が許可された 宿直・日直の勤務体系

集中系病棟の場合

※日直…1回／月
宿直…1回／週

平日	ICU・救命救急病棟	8:30	17:30	宿直	8:30	17:30	日勤可
	HCU・SCU	8:30	17:30	22:00	宿直	8:30	17:30
休日	ICU・救命救急病棟	8:30	17:30	日直	宿直	8:30	17:30
	HCU・SCU	8:30	17:30	22:00	日直	宿直	8:30

- 【言葉の定義】
- 日直、宿直…軽微な処置や定期回診などで、断続的な業務がなく一定の仮眠がとれる。
 - 日勤、夜勤…通常業務。

医師の働き方改革

2024年度
スタート!

「医師の働き方改革」では、時間外労働を原則、年960時間以下に収めることを目指し、段階的に上限を3つの水準に分けてスタートします。近森病院は、救命救急センターかつ臨床研修病院（基幹型）でありながら、より厳しいA水準取得に向け業務改革を進めています。ワークライフバランスが整った魅力的な職場となり、質の良い医師を多く集めることで、病院の持続性と患者さんの利益向上を目指しています！

国がはじめた理由

- 医師の過労死
- 高齢社会に向けて、医師不足の解消



そのために、① 医師の労働環境の改善
② 医師の健康確保

	対 象	時間外労働上限
A水準	全ての勤務医	年960時間以下／ 月100時間未満（休日労働含む）
B水準	地域医療の確保のため、救急医療や高度ながん治療などを提供する医療機関	年1,860時間以下／ 月100時間未満（休日労働含む）
C水準	初期臨床研修医・新専門医制度の専攻医や高度技能獲得を目指すなど、短期間で集中的に症例経験を積む必要がある医師	年1,860時間以下／ 月100時間未満（休日労働含む）

患者さん・ご家族へ

完全主治医制

休日／夜間を問わず
何かあれば主治医コール



当番当直医制

休日／夜間は
当直医や当番医が対応



段階的に
導入中!

治療説明

平日の日中に



※緊急の
場合を除く

しっかり休んでいる、
元気な医師が
診療・手技・手術を
します!





植込み型心臓電気デバイスの リード拔去術

～特殊シースを用いて～



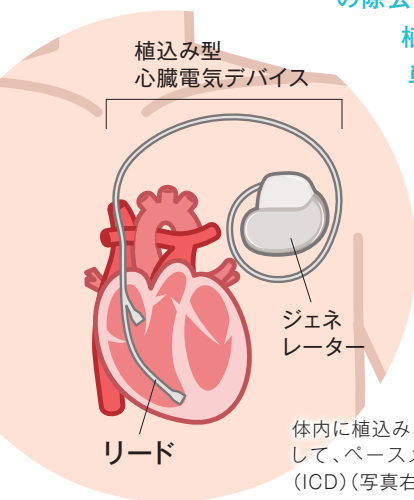
近森病院 循環器内科 科長
菅根 裕紀 すがね ひろき

植込み型心臓電気デバイスの手術は全国で年間6万件以上が行われています。そのなかで、何らかの外傷や他の疾患からの感染により、**デバイス本体が感染してしまう**場合があります。感染すると菌血症や感染性心内膜炎などを起こす恐れもあるため、デバイスの除去が必要です。

植込まれて年数が長いリードは、静脈や心臓の壁に癒着し単純に牽引しても抜けません。従来は開胸手術による摘出が行われていましたが、今回当院では、**特殊シースを用いた開胸しないリード拔去術を行えることになりました。**



エキシマ
レーザーシース



▲
体内に植込み、不整脈を治す治療に使われるデバイスとして、ペースメーカー（写真左）や植込み型除細動器（ICD）（写真右）、心臓再同期療法（CRT）等があります。

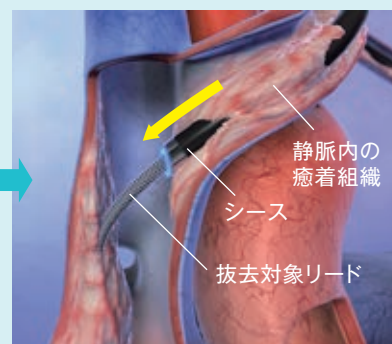
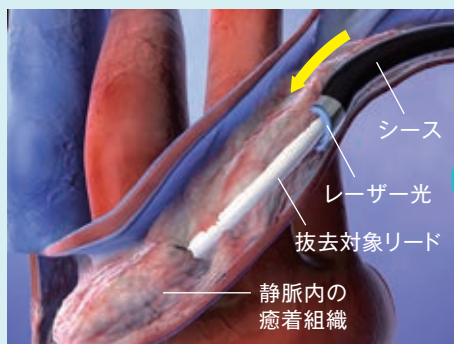
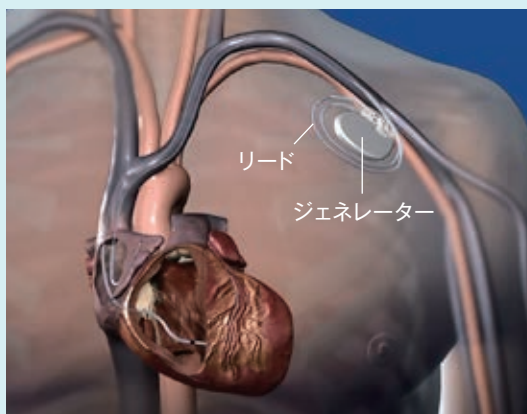
適切なタイミングのリード拔去で、 死亡率50%を半分以下に

今年から当院でエキシマレーザーシースなどの特殊シースを用いたリード拔去術が施行できるようになりました。対象となる患者さんは主にペースメーカーなどの植込み型心臓電気デバイスへの

リード拔去の一例 感染したデバイスリードをエキシマレーザーシースにより拔去

- 1 全身麻酔をかけます。
- 2 緊急時に備えて、体外式ペースメーカーの挿入やその他、必要処置を行います。
- 3 ジェネレーターが植込まれている肩の部分を切開し、ジェネレーターを取り出します。

- 4 ジェネレーターからリードを取り外し、処置を施したリードの端からエキシマレーザーシースを被せて、リード全体をシースで飲み込むように進ませます。



このシースの先端から全周性に発射するレーザーが、血管の癒着からリードを剥がします。

細菌感染を起こしてしまった方です。植込み型心臓電気デバイスに細菌が付着してしまうと、死亡率は実に50%以上と非常に高く、再発率も80%近くであると報告されています。この非常に高い死亡率と再発率は、適切なタイミングでリード抜去を行うことで半分以上にすることができます。

複数の医師や専門性の高いスタッフからなるチームを必要とする高度な手技

このリード抜去手技はリードと血管や心内構造との癒着を専用のカテーテルで剥がす手技です。血管や心臓の損傷に気をつけながら行う必要があります。術後は感染のコントロールを行い、数週間後に新しいリードを含めた新規のデバイスを挿入します。感染症の状態が重篤であれば、術前から集中治療を行い、全身状態を立ち上げつつ手技を行う必要があります。手技中だけでなく、その前後も集学的な治療(※)を必要とするため、当院では複数の医師を含めたデバイス抜去チームで治療を行なっています。

※専門分野が異なる複数の医師や専門スタッフがチームとなって行う治療

高知のデバイス治療を支える循環器内科の使命

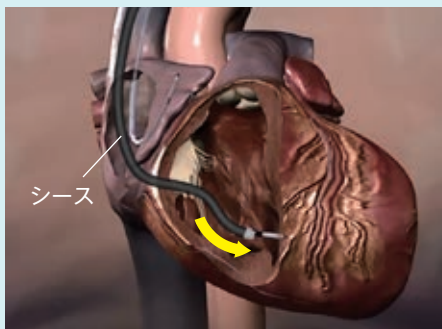
これまでは、リード抜去が必要な患者さんは岡山県へ紹介していました。しかし、高齢や家族の付き添いができないなどの理由で県外への紹介を希望されない方も多くいらっしゃり、今後は、そのような患者さんのニーズにも応えることができます。

当院では年間200件以上の新規の植込み型心臓電気デバイスの挿入を行なっています。よって、デバイス植込み後、1~2%で発生する感染症に対応することは当院の使命だと考えます。感染症の早期発見と速やかなリード抜去が明暗を分けます。

デバイスに感染が疑われる場合は当院へ

植込み型心臓電気デバイスを留置後の患者さんと、菌血症や感染性心内膜炎などが疑われる場合はいつでもご紹介ください。術中はもちろん、術前術後を含めて、全力で対応させていただきます。

- ⑤ リードの先端部近くまでシースを進ませ、癒着から剥離したリードを安全に引き抜きます。
※入っているリードの数だけ同手順を繰り返します。



- ⑥ 切開部位を閉創します。

- ⑦ 感染が落ち着くまで、緊急用に入れた体外式ペースメーカーを一時的に留置し、2~4週間後、新しくデバイスを留置します。

※リードの断線などの場合は、⑤のリード抜去後、そのまま新しくデバイスを入れ、切開部位を閉創し完了です。



- エキシマレーザーシースの他、器械的なシースにより、物理的にリードを癒着組織から剥離する方法もあります。

※画像提供：株式会社フィリップス・ジャパン、クックメディカルジャパン合同会社、日本メトロニクス株式会社

一緒に働きませんか？



ALL CHIKAMORI
近森就職
セミナー
2023

GW
初日

5/3

水・祝

近森会グループに就職を考えている方を対象に、就職セミナー（オープンホスピタル）を開催します。近森病院・リハ病院・オルソ病院の見学や、各職種の説明会等を予定しています。

※詳細が決まりましたら、近森会グループHPや各学校へチラシにてご案内します。ご参加をお待ちしています。

近森で学ぶ。



OPEN CAMPUS
オープンキャンパス

近森病院附属看護学校
6/4 SUN
7/29 SAT
8/20 SUN
10/22 SUN
2024
3/23 SAT

※感染予防の観点から事前申し込みをお願いします。

<https://www.chikamori-hns.com/>

開催時刻や当日の体験メニューはホームページをご覧ください。



近森看護



088-871-7582

※受付9:00~17:00
平日のみ

出張

第31回 全国救急隊員 シンポジウムの発表を終えて

2023年1月26～27日

近森病院 救命救急センター 上総 麻里子
ER 救急救命士 主任 かずさ まりこ

1月26、27日、広島で開催された全国救急隊員シンポジウムに参加させて頂きました。

今回のテーマが「Link 救命への思いをつなぐ ～平和を願う街ヒロシマから～」ということで、当院の救急救命士の役割とチーム医療について発表させて頂きました。大ホールでのシンポジストでとても緊張しましたが、「近森病院は多職種がそれぞれの役割を理解し、チーム医療を推進している病院であり、「すべては患者さんのために」を考え自律・自働している、専門性を発揮できる病院である」ことを全国の救急隊員や医療機関の方々に知って頂けたのではないかと思います。

私が近森病院に入職して16年、ERスタッフの数も増え、最初は1人だった病院救命士も今では9名となり、曖昧だった業務内容も明確化し、立場も確立出来てきたのではないかと感じております。

また、2021年に救急救命士法が改正されたことで、コロナ禍で遅れておりますが、今後、院内メディカルコントロール体制を構築し、病院救命士の業務拡大を行い、さらにチーム医療の一員として貢献できた



左：執筆者、右：救命救急センター 根岸センター長

らと思っています。

今回の発表は根岸センター長をはじめ、ERスタッフ、スライド作成をお手伝い頂いた診療支援部 山崎部長がいてくれたからこそできたものと思っています。この場をお借りしましてお申し上げます。

これからも現状に満足するのではなく自己研鑽に努め、病院救命士としての「やりがい」を見つけていきたいと思っています。貴重な機会を頂きありがとうございました。

2021年 救急救命士法の改正

従来は、救急車内でのみ医療行為が認められていましたが、法改正により、病院内で重度傷病者に対する救急救命処置ができるようになりました。（当該患者さんが入院するまで、または外来で滞っている間に限る）

看護部 新人看護師研修「振り返りの会」

近森病院 2023年2月2日・26日
リハ病院・オルソ病院 2023年2月14日

看護部 キャリア開発課 久保 博美
看護師長 くぼ ひろみ

2022年度新人看護師研修「振り返りの会」を、各病院に分かれて実施しました。今年度も全員が一堂に会することはできませんでしたが、各回、新人看護師たちが多くのことを学び、成長していることを確認できました。

成長や課題の発表・討議では、自分のことのみではなく、仲間の成長を互いに認め合う様子がみられ、やがてはチーム医療につながっていく小さな芽がみられました。特に今年度は医療者を含めた感染者数増加を受け、新人看護師も他部署応援を経験し、不安や戸惑いを調整しつつ、できることに取り組む自己調整力も磨かれたと感じています。

いよいよ社会全体も新たな段階を迎える新年度、身につけた力を患者さん・ご家族のためにさらに発揮していけるよう支援していきます。



▲ 4月から一緒に働く仲間へメッセージ



国内留学

「大動脈外科」という沼にどっぷり浸かった半年間

留学期間／2022年8月1日～2023年1月30日



近森病院 心臓血管外科 科長 衣笠 由祐
きぬがさ ゆうすけ



2022年8月から半年間、広島市民病院心臓血管外科大動脈グループへ国内留学させていただきました。治療対象疾患は、大動脈基部病変、大動脈瘤（胸部、胸腹部、腹部）、大動脈解離、末梢血管疾患まで多岐に渡りますが、中でも特徴的なのが胸腹部大動脈置換手術の多さです。心臓血管外科手術の中でも最高難度の手術の一つとされており、一般的な心臓血管外科では年に数例あるかどうか、といったところですが、同院では毎年20例以上の胸腹部大動脈置換手術を実施しており、治療成績も非常に良好です。

大動脈疾患は解離や破裂を除いては基本的には無症状である一方で、手術は高侵襲・高難度となる場合が多いため、治療適応判断が非常に難しく、有症候が治療適応となる心臓手術とは考え方が随分異なると思います。

同大動脈チームは、多くの治療経験と良好な成績に裏付けられた確立された治療理念があり、患者の将来まで見据えた治療を常に意識されていました。私もチームの一員として非常に多くの大動脈診療・手術に携わり、胸腹部大動脈置換手術の部分執刀、弓部置換術やステントグラフト手術の執刀など様々な経験を積むことができました。

今後の高知県医療における大動脈治療は必要不可欠であり、患者数はさらに増加すると思います。私自身まだまだ若輩者ではありますが、広島市民病院で学んだ経験を生かしながら地に足をつけて研鑽を積み、最終的には、大動脈治療なら近森で、と言われるよう日々邁進していきたいと思っています。

講演会

高知医療再生機構講演会・シリーズ企画
「高齢者を診る・識る・癒す」

全講演を終えて

学術担当顧問 土居 義典
どい よしのり

2022年度のシリーズ企画では、「専門領域の視点から」と題して、高知大学の先生方による超高齢者の診療の問題点と対策のポイントについての御講演が行われ、薬剤性腎障害が高齢者で著増することや糖尿病では合併症のオンパレードになること、また高齢者に多いCOPDではフレイルへの移行防止がとくに大切であること、さらに高齢者では単に医療のみならず心理状態・身体機能・社会環境にも配慮した診療が求められること、などを学ぶことができました。

2023年度も、超高齢患者に特有の病態への理解を深め、当院においても専門性のある診療とともに超高齢患者の命に向きあう医療が行われることを目指して、このシリーズ企画を立てたいと思います。

第1回	2022.11/17 (木)	演題 「高齢者における腎機能障害の診療のポイントと最近の話題」 講師 寺田 典生 先生 (高知大学医学部 内分泌代謝・腎臓内科学教授)
第2回	2022.12/15 (木)	演題 「糖尿病診療の最近の動向」 講師 藤本 新平 先生 (高知大学医学部 内分泌代謝・腎臓内科学教授)
第3回	2023.1/5 (木)	演題 「今こそ必要とされる 日常診療における老年病学的視点」 講師 北岡 裕章 先生 (高知大学医学部 老年病・循環器内科学教授)
第4回	2023.1/19 (木)	演題 「COPDをご存じですか? ~健康寿命の延伸に向けて~」 講師 横山 彰仁 先生 (高知大学医学部 呼吸器・アレルギー内科学教授)



写真左／第4回の講師、横山彰仁先生
写真右／執筆者：後列中央



近森病院附属看護学校
2022年度・第6期生

卒業式

2023年3月3日

多くの方に支えられて

近森病院附属看護学校 3年生 入交 由希子
いりまじり ゆきこ

入学前は社会人経験を経て数十年ぶりの学生生活に対し、勉強についていけるのか、クラスに馴染めるのか不安でしたが、家族の手助けや、同じ境遇の友人、見守ってくださる先生方に支えられ、課題や試験、臨地実習など一つ一つを何とか乗り越えてきました。

楽しい事ばかりではなかったけれど、若い頃には実感できなかった、学ぶことの楽しさや机上の学習では点でしかなかった知識を臨地実習では点と点を線で繋げていく事ができ、患者さん、指導者の方、先生方から多くの事を学ばせて頂き充実した学生生活を送ることができました。

この感謝の気持ちを忘れずに4月からは看護師として「患者さんのために」少しでも力になれる様に精進していきたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



夢へのスタート

近森病院附属看護学校 教務主任補佐 上総 満高
かずさ みつたか

卒業生は、3年前に入学した時から新型コロナウイルス感染症により、社会生活が様変わりしたなかで3年間で過ごしました。学校行事も軒並み中止となり、授業も対面からオンライン、実習も病院や施設などに行きことができず、学内での実習へと切り替わるなど多くの制約があったため、それぞれが思い描いた学生生活を送ることができなかったように思います。

しかし、このような状況の中でも、看護師になりたいという夢を最後まで諦めることなく、ひたすら前を向いて歩み続けたことで、卒業生43名は無事に次の場所へと巣立っていきました。これから進む医療の現場は決して楽な道のりではないと思います。しかし、今回の逆境を乗り越え、無事卒業した皆さんならきっとどのような困難も乗り越えられると信じています。

自信をもって一步一步前に進んでください。走らなくて良いですからね。





学生表彰受賞の皆さん



熱烈応援 昇格人事

学生第一!

近森病院附属看護学校
教務主任補佐 **上総 満高**
かずさ みつたか

看護学校が開校して今年で9年目になります。先月6期生が卒業し、これまでに235名が巣立ち、それぞれが看護師として活躍している姿を見ることは教員冥利に尽きます。これまでと変わらず、学生に寄り添い、学生にとって何が一番大事なのかを考えながら、高知県の保健医療福祉に貢献する看護師を育成していきたいと思っています。



近森会グループで元気に働く仲間を紹介します

ハッスル研修医

特に既往歴のない男性研修医

こんにちは。先日、自動車に轢かれてしまい近森病院に救急搬送された初期研修医1年目の三浦格です。患者としてERに救急搬送されたことで、搬送から検査・治療のスピーディーさと、何気ない声かけが不安を和らげてくれることを体感しました。対応してくださったスタッフの方々、その節は誠に有り難うございました。

大阪府出身で群馬大学卒業の私にとって高知県は初めて生活する場所で、仕事や日常生活も楽しみで溢れています。

特に仕事では、様々な科で研修させていただき、それぞれの科で沢山のことを経験させていただきました。多くのことを経験し知識を得たり手技を身に付けたり、また、それらを次の機会に活かせられた時は本当に嬉しく思います。

この1年間は、未熟な部分が多々あり、自分の成長よりも力不足や至らなさを感じる事が多くありました。これまでの反省を活かし残り1年の研修医生活も有意義なものにしたいと思っています。

初期研修医1年目
三浦 格
みうら ただし



告知

第23回 公開県民講座

3年ぶり開催

コロナの間に進んだ医療



7/23 日

時 14~16時
場 かるぽーと大ホール

詳細は
コチラ





リレーエッセイ

with コロナ

~ユニバーサルスタジオジャパン~

近森病院 北館2階病棟 看護師

太田 和弥 おおた かずや

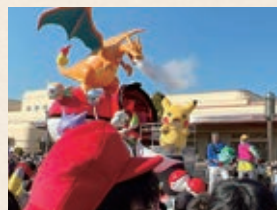


日常生活のマスク不要化、5類への移行など、
ようやくコロナウイルスと共存できる社会になりつつある今日このごろ。

私は10年ぶりに、ユニバーサルスタジオジャパンに行ってきました。目的はNO LIMIT!パレード。4歳の長男はポケモンが大好きで、2ヶ月も前から「あと何回寝たらばけもんばれえど行ける?」と気が遠くなるカウントダウン。

いよいよ迎えた当日、遠くに見えたパレードの行列に大興奮!「ピカチュウや!ゲンガーもおで!ほらあっちよ!パパちゃんと見て!」と怒られる始末。それでも私も抱っこしたまま飛び跳ねノリノリ。オープニングが終わるとパレード御一行は園内を回るため、

一度見えなくなりました。そして気がつくと、彼はパパの肩にもたれ、眠っていました。朝の4時に起こされ、車では興奮して一睡もしてなかったから仕方ないのですが。何ヶ月も前から楽しみにしてたパレードを見れないなんて、起きたときにどれだけ泣き叫ぶか。微笑ましく見ていると2mほど目の前に先頭車が!ポケモンは最後尾です!必死に起こし続け、うっすら目を開けては閉じるを繰り返して、SINGのゴリラを見てなんとか覚醒。そして、とろけそうな顔でにこー。この笑顔があれば何でも頑張れそうな気になりますね。ポケモンが目の前に停まる頃にはテンションは最高潮で、最後まで全力で非日常を楽しむことが出来ました。



長い間自粛ムードで忘れかけていましたが、楽しむことが悪ではありません。適切な知識と感染予防技術があれば、これまでの日常を取り戻していける。そう感じた1日でした。



私の趣味

大切な時間

近森リハビリテーション病院
6階病棟西 看護師

尾崎 一生 おさき いっせい



私にとって音楽に触れる時間は大事な気分転換の時間です。きっかけは高校生の時。それまで音楽にはほとんど興味がなかったのですが、友人に誘われギターを始めたことがきっかけでした。そこから色々なアーティストを聞くようになりましたが、自分がギターを弾いていたこともあり、BUMP OF CHICKENやELLEGARDENなどロックに惹かれ



るようになりました。
特にBUMP OF CHICKENはお気に入り、初めて買ったCDもそうでした。お小遣いを貯めて、TSUTAYAやCDショップを回ったのはいい思い出です。

学生時代は友人や好きなアーティストのライブに行っていましたが、ここ数年はコロナ禍の影響でライブ自体が中止になることもあり、なかなか参加できませんでした。そんな中でも、家で音楽を聴いたりギターを弾いたりする時間は、私を支えてくれる大切な時間でした。ギターの腕前は今でもたいしたことはないですが、これからも長く続けていこうと思っています。



FREE

私の〇〇

〇〇にフリーワードを入れて
語っていただきました

私の「ピアノ」

近森病院 言語療法科
言語聴覚士 主任

池 祐子 いけ ゆうこ

私は小学生の頃、ピアノを習っており、両親が電子ピアノを準備してくれていました。初めはグループレッスンを受け、合奏して一曲を仕上げていくスタイルでした。友達と協力して曲を仕上げていく過程は楽しく、達成感がありましたが、進級するにしたがって個人レッスンに切り替えることになりました。ピアノ



を弾くこと自体は楽しかったのですが、グループレッスンでの充実感にはほど遠く、程なくしてやめてしまいました。

それ以降は、時々楽譜を購入し、一人寂しく弾いていましたが、社会人になってからは、ほとんどピアノに触れることなく、以前のように弾けなくなり、本などの物置となり、ホコリをかぶっていました。

そんなかわいそうなピアノでしたが、子どもがピアノを習い始めてからは、本来の役割を果たすようになってきました。毎晩10分程度ですが、子どもの練習に付き合ってくれています。これからも長く使えるよう、大事にしていきたいと思います。

近森病院 患者さんアンケート 結果報告

第2回

改善例 2

点滴スタンドの購入

2022年9月、6階B病棟
と7階A病棟の患者さんより

「移動できる点滴スタンドが欲しかった」、「ベッド
備え付け分だと動けなくて不便」といった旨の記載がありました。

そこで、看護部では全病棟をチェックし、新たに40台(※)を
新規購入することとなりました。

※古くなって廃棄した点滴スタンド
の入れ替え分も含みます。

改善担当:近森病院看護部より

点滴は短くて30~60分、長い時
は24時間に及ぶことがあります。
お手洗いや売店への買い物など、
患者さんの日常生活をできるだけ
制限することの無いよう気を配りたい
と思います。



今月のちかもり食

—— エームサービス株式会社 ——

2月14日(火)

Happy
Valentine



2月14日の昼食にチキンライス・ツナサラ
ダ・チョコパバロアを提供しました。

チキンライスはバターの香りが良く、どんど
ん食べ進めたくなる味つけになっています。

濃厚なチョコレートのパバロアにホイップ
を乗せた、バレンタインにぴったりのデザート
です。

つつい止
まらなくなっ
てしまうチョコ
レート、食べ
過ぎには気を
付けたいです
ね。



壮行式

2023年2月11日



近森病院附属看護学校
2年生

野瀬 菜 のせ しおり

2月12日に行われた看護師国家試験に向かう3年生を激励
するため、2月11日に看護学校内で壮行式を開催しました。

今年はひと月ほど前に願い札を準備し、1月の末にJAL様の
合格祈願サービスをお願いして、福岡県の太宰府天満宮に奉納を
行いました。

合格を願ったプレゼントやエールを送り、無事、6期生を送ること
が出来ました。

国家試験に向かうという緊張感や後ろ姿に感動しました。その
姿を見て私達は1年後、2年後同じ立場になると改めて実感しまし
た。本当に国家試験お疲れ様でした。

私達は6期生全員の合格を願っています。

編集室通信

コロナ感染との戦いも3年が経ち、新たな生活
様式も当たり前になってきた今日。感染症法上の
分類を5類に下げるからマスクなしOKと言われて
ても…。マスクで隠れるからよかった諸々が…。
でも、なかなかマスク越しで分かりづらかった表情
が見えるのはいいこと。自信をもってマスクが
外せるように、今からお手入れ頑張ろう! 充

診療数

令和5年2月

—— 電子カルテ管理課 ——

● 近森会グループ

外来患者数 15,715人
新入院患者数 993人
退院患者数 957人

● 近森病院(急性期)

平均在院日数 12.05日
地域医療支援病院 紹介率 90.03%
地域医療支援病院 逆紹介率 319.96%
救急車搬入件数 462件
うち入院件数 268件
手術件数 496件
うち手術室実施 322件
うち全身麻酔件数 213件

看護学校通信

久保 行広

Yukihiro Kubo

画像診断部 副技師長
診療放射線技師

聞き手／ひろっぱ編集部

「挑戦力」と「兄貴肌」で
画像診断部を
盛り上げる

「やってみないとわからない」

自分に合うか合わないか、たとえ失敗しようとも“やってみないとわからない”というようなセリフが何度か聞かれた。現在、管理職として後輩指導や画像診断部の組織作りに取り組む久保副技師長のテーマと捉えられた。

高校卒業後は何をするか決めかね、東京などでバイトを転々としながら暮らす。このままではいけないと思っていた時に、知人から放射線技師を勧められ進学。昼は病院で助手、夜は専門学校に通った。「自堕落（本人談）のリミットを超えると、反動で頑張れる性分の方で」と自己分析する。

以前は現在より15kgほど体重があり、50歳を機にダイエットを開始。ジョギングにはまり半年ほどで10kg痩せたという。「余りにも急激だったので周囲は病気と思ったみたいで、気を遣って話しかけてくれなくなりました。ランナーズハイになって10、20kmと距離も増え疲労骨折してしまいました（笑）」。

その後はペースを抑えているというが、高知龍馬マラソンや土佐塩の道トレイルランニングレース（41.7km（累積標高：1,987m））に同僚と出場するなど、見事にアスリートな日常へ転換されている。



果樹園再生への道

今、最もはまっている趣味が2年前から始めた果樹園再生。同僚から「祖父がやめた果樹園を何とかしたい」という話を聞いたのがきっかけで、久保副技師長が音頭をとり、画像診断部を中心に10人ほどのメンバーで取り組んでいる。「一日中、芝を刈り乱立した竹と格闘しています。整備した一画に陽が差し込んだり木が元気になったりしたのを見ると達成感が溢れてきます。美味しい果実として食べられるのはまだまだ先の楽しみ。いかに剪定が大切か…。もうすぐ筍も出てくるし忙しい…」と栽培の工夫や魅力をととうと語る。農業を通じて同僚との交流を深め、リフレッシュになっているようだ。



本がないと寝られない大の愛書家

「この間までは『ペンギンの生態学』を読んでいた。寝る前は堅い本を読みます。おもしろい物語系は寝られなくなるので。読まずに批判するのは嫌なので、芥川賞などの話題作も読破する方です（やってみないとわからない持論）。最近では走りながら小説をオーディブルで聴くことも多いですね」。

編集部の女性スタッフがざらりと読める小説を問うと、西加奈子や町田その子などの恋愛小説を勧めてくれた。ノージャンルに本の海を泳いでいるのが想像できた。

画像診断部をよりよい形で次世代へつなぐ

現在は主に「核医学検査」を担当する一方で、副技師長として部の組織改革を推進する。「うちのスタッフは働き者で尊敬します。優秀ですしね」と自慢。「でも立场上厳しいことも言わないといけなくて、嫌われたくないのに」と管理職の嘆きで笑いを誘いつつも、大所帯となった部署の未来を見据え様々な改革を行っている。その一つが教育制度で、スタッフにキャリアアップの道筋を示し目標を持って成長できるよう、ラダー方式を取り入れた制度の構築に取り組んでいる。

「うちの新人研修のゴールは、1人で当直できること。これは全員が全ての検査機器を扱えることを意味します。夜間の救急搬送等で、当直技師が扱えない機器での検査が必要な場合、他の技師が呼び出されるといったことが業界的に問題になっています。それが無いのは近森の強みです。早く検査できることは、なにより患者さんのためになります。しかし、その先の専門性をつけるのも必要と（同じく副技師長の）竹内君や皆と考えていて。今は過渡期なんです」。

仕事の話となると少年のような雰囲気は鳴りを潜め、わかりやすく穏やかな説明が印象的である。見えないところで勉強を怠っていないことも十分伝わった。

話題豊富で話し上手な一方、自然に相手に話を振る聞き上手。気が付けば取材メンバー含め4人での雑談のような雰囲気に。居酒屋で話をし尽くした後のような開放感をいただいた。

